

成果発信

考える力を育む授業づくり研究会

～ 実践を通して、今、求められる授業の在り方を探る ～

昨年度まで5年間の「さんさん」プランを基盤とした探究型学習の推進により、探究型学習の周知が図られ、管内の多くの学校で探究型学習による授業改善が進められました。特に、学ぶ側の思考に立った授業づくりが進んでいること、課題設定や協働的に学ぶ場面の設定、振り返りの位置付けなど、プロセスにおける工夫改善が促進したことは大きな成果です。

この成果を「確かな学力」の育成に確実に結び付けていくために、今年度置賜教育事務所では、授業づくりの重点を見直し、授業づくりの方向性を「付けたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業」として各事業に反映してきました。その一環として『考える力を育む授業づくりのスタンダード』を作成し、授業改善の拠り所として活用していただけるよう、5月に各学校に送付したところです。先生方の授業づくりの手がかりとなったでしょうか。

確かな学力の育成には、「付けたい力は何か」、「子供がどのように学べばその力は育成できるのか」、「学びを通しその力は付いたのか」、「付いていなければどう補完するのか」という視点から「目標-指導-評価」の一貫した授業を構想・実施し、授業の中にPDC Aサイクルを確立させることが重要です。つまり「指導と評価の一体化」を図るということです。上記『スタンダード』はその視点を重視して作成しました。

今年度の「考える力を育む授業づくり研究会」は、上記『スタンダード』の具体となる授業を構想・実施してその効果を検証し、改善につながることを目的の一つとして行いました。管内の5名の先生方に教科研究員としてご協力いただき、「付けたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業の実践」をテーマに、授業づくりを通して「求められる資質・能力の育成につながる授業とはどのようなものか」を探究したところです。教科研究員の先生方と置賜教育事務所指導主事がチームになって、小学校（国語、算数、社会）と中学校（数学）の4教科5部会で行いました。学習評価は、国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』に基づいた形で行っており、指導案の形式も参考資料に基づいています。様々な面から提案性の高い実践となっていますので、本通信で紹介します。

【考える力を育む授業づくりのスタンダード】

<生きる力の基盤となる確かな学力の育成>

1 各種調査等の分析から見える児童生徒の実態把握と身につける力の明確化	
指導内容に関する児童生徒の実態(何ができて、何ができないのか)を把握しましたか	
学習指導要領の内容(何を学ぶのか)と児童生徒の実態を踏まえて、身につける力を設定しましたか	
単元の目標を達成した姿(何ができるようになればよいのか)を児童生徒と共有していますか	
2 教科特有の見方・考え方を働かせながら課題解決していく学習過程(どのように学ぶか)の重視	
働かせる見方・考え方(何を手がかりに考えるのか、着眼点は何か)を意識していますか	
目標達成のために、一番考えさせたいこと(本時、単元)は何で、効果的な学習形態は何ですか	
教科の本質に迫るための教師の手立て(深めるための問いなど)が明確になっていますか	
3 児童生徒の主体的な学びにつなげるための振り返りの場の設定	
考えの広がりや深まりを自覚する振り返りになっていますか	
単元全体の課題解決と振り返りがつながっていますか	
4 目標-指導-評価の一貫した単元・授業構想	
学習指導要領の内容を踏まえ、目標を適切に設定していますか	
学習過程において、必要に応じた学習状況の把握をしていますか	
把握した学習状況に応じて、目標達成に必要な適切な指導をしていますか	
目標に対する個々の学びの評価(力がついたかどうか)を確実にし、指導の改善につなげていますか	

研究テーマ

「付けたい力を明確にした、
教科の本質に迫る授業の実践」

【視点】

☆生きる力の基盤となる確かな学力の育成に向けて、「付けたい力は何か」、「子供がどのように学べばその力は育成できるのか」、「学びを通しその力は付いたのか」、「付いていなければどう補完するのか」という目標-指導-評価の一体化を重視し授業を構想する。

☆教科の本質に迫るための重要な要素である「各教科特有の見方・考え方」について明らかにし、児童生徒がそれを働かせながら鍛えていけるように授業を構想する。

【研究チームの紹介】

部会名	小学校国語	小学校社会	小学校算数A	小学校算数B	中学校数学
教科研究員	米沢市立北部小学校 鈴木麻実 教諭	高島町立屋代小学校 阿部達也 教諭	米沢市立愛宕小学校 後藤祐平 教諭	高島町立高島小学校 山田思美 教諭	小国町立小国中学校 佐々木健吾 教諭
指導主事	安藤・海老名	平賀・地主	大塚・色摩	多勢・色摩	星野・多勢

【実践の概要】

<小学校国語 第6学年>

授業者 米沢市立北部小学校 鈴木 麻実 教諭

単元名	複数の文章を基に、「これからの社会と生き方」について自分の考えをもって話し合おう
教材名	『メディアと人間社会』池上彰、 『大切な人と深くつながるために』鴻上尚史（光村図書）
資料	プログラミングで未来を創る
言語活動	「複数の文章を基に、“これからの社会と生き方”について自分の考えをもち、話し合う」活動

【付けたい力】

論の展開や表現に着目し、正しく文章の内容や構造を捉え、精査・解釈しながら考えたり理解したりしたことを基に、自分の考えを形成し、適切に表現する力

【見方・考え方を働かせた学習過程】

全6時間中の2次（2～5時間目）の学習過程
論の展開の仕方が大きく異なる複数の説明文を読み、表現の工夫に目を向け比較することで、筆者の主張とどう結びついているか、言葉による見方・考え方を働かせながら、国語で正確に理解し適切に表現する。

【成果】

- レディネステストから児童の実態について把握し、身に付いていない既習を指導したうえで、本単元で付けたい力に迫った。国語における事前の実態把握の有効性が明らかになった。
- 学習指導要領で指導事項、指導内容を明確にし、系統性を重視するとともに、学年間の差異を明らかにしたうえで指導したことが、第6学年で付けるべき力の育成につながった。

<小学校社会 第4学年>

授業者 高畠町立屋代小学校 阿部 達也 教諭

単元名 「置賜に水を 黒井半四郎」	学習指導要領	2内容（4）「先人の働き」
-------------------	--------	---------------

【付けたい力】

当時の世の中の課題や人々の願いなどに着目して、地域の発展に尽くした先人の具体的事例を捉え、先人の働きを考え、表現する力

【見方・考え方を働かせた学習過程】

調べたり考えたりしたことを総合したり、関連付けたりすることで、黒井半四郎の苦心や努力は当時の人々の生活の向上につながったことをつかませるなど概念化を図る。

【成果】

- 学習指導要領で求められる付けたい資質・能力を明らかにしたうえで、地域の歴史的事実を教材化するために教師自身がフィールドワークを行い資料を集め、教材に対する理解を深めた。そのことが、ねらいに応じて教材の特性を生かす授業づくりにつながり、児童が興味、関心を持って学習に取り組むだけでなく、資料から読み取った歴史的な事実を根拠に考え、総合したり関連付けたりして概念化していく社会科の本質的な学びを作り出した。
- 思考ツールの活用が、個別の知識を総合したり、関連付けたりして概念化していく場面では効果的であることが明らかになった。

<小学校算数 第5学年>

授業者 米沢市立愛宕小学校 後藤 祐平 教諭

単元名 「割合 比べ方を考えよう（2）」（東京書籍 5年）	学習指導要領	2内容 C（3）割合
-------------------------------	--------	------------

【付けたい力】

割合の三つの関係（割合、比べる量、もとにする量）を数直線等に整理して捉え思考し、日常の問題解決に生かす力

【見方・考え方を働かせた学習過程】

二つの数量の関係に着目し、問題の条件や割合の求め方を基に、何を基準量とし、何を比較量とするかななどを筋道を立てて考える。

【成果】

- 数直線に数量の関係を整理し思考する活動を単元を通して一貫して行った結果、数直線を使った数量の整理の仕方、数直線から2数量の関係を読み取る力が高まり、単元後半では進んで数直線を活用する児童に育っていた。
- 付けたい力を明確にし、レディネステストから児童のつまづきを分析して単元の構想や指導に生かすことで、指導の焦点化が図られ、児童の「わかる」「できる」「やってみよう」を引き出す授業となることが分かった。

<小学校算数 第4学年>

授業者 高島町立高島小学校 山田 思美 教諭

単元名 「分数をくわしく調べよう」(東京書籍 4年) 学習指導要領 2内容 A(5) 分数の加法, 減法

【付けたい力】

分数を構成する単位(単位分数)に着目し、1より大きい分数を理解するとともに、既習の計算方法(整数の加減法)に帰着させて計算の仕方を考える力。目的に応じて形を変えて使うことができる分数のよさを生かし、よりよく問題解決しようとしたり、学習したことを活用しようとしたりする力。

【見方・考え方を働かせた学習過程】

同分母の真分数・仮分数・帯分数の加減計算の方法を考える際、テープ図を活用して単位分数に着目し、そのいくつかで考える。説明する際も、「単位分数のいくつか」で考えたことをテープ図を活用して説明する。

【成果】

- レディネステストからつまずきを把握し身に付いていなかったテープ図の見方をしっかり教えたうえで、それを使って単位分数に着目させながら計算方法を考えたり、考えたことを説明する活動を繰り返した結果、「単位分数に着目して、そのいくつかで考えればよい」という考え方を確実に習得することができた。
- 「児童に期待したい振り返り」を毎時間具体的にイメージして授業を構想することで、児童の振り返りを分析する視点が明確になり、「振り返り」を学習状況の適切な評価と指導の改善に生かすことができた。

<中学校数学 第3学年>

授業者 小国町立小国中学校 佐々木 健吾 教諭

単元名 「標本調査」(啓林館 中3年) 学習指導要領 2内容 D 資料の活用 (新ではデータの活用)

【付けたい力】

標本と母集団の関係に着目し、母集団の傾向を推定し判断したり、調査の方法や結果を批判的に考察したりして調査結果の信頼性や妥当性まで検討してよりよい判断に生かす力

【見方・考え方を働かせた学習過程】

池の魚の総数を推定するにはどうすればいいかを考える活動において、池の状況を疑似的に作って標本調査を行い、自身の行った標本調査の妥当性を考察する。そのうえで精度を上げるにはどうすればいいかを考え、調査方法の改善を図っていく。

【成果】

- 実験を通して標本調査の妥当性を検討したことで「標本調査における無作為抽出の必要性」について理解を深めることができた。また日常生活の中で目にする標本調査についても、適切な方法により得られた妥当な値なのか、その信頼性について考えを広げるなど学びが深まった。
- 獲得した知識及び技能を活用しながら生徒が主体的・協働的に問題を解決していく探究的な学習を単元末に設定することで、求められる三つの資質・能力の総合的な育成が図られることが分かった。

教科研究員の先生方にお聞きしました!!



Q. 今回、授業(単元)を構想する際に、悩んだことは何ですか?



「付けたい力(資質・能力)を明確にする」ということが、実はとても難しかったです。



教科書の教材を学習指導要領の指導事項に照らし合わせて解釈を進めることが大変でした。自分の解釈が正しいのかどうか分からなくて・・・



「教科特有の見方・考え方を働かせる」ということも、具体的にどういうことなのか悩みました。



そんな時、指導主事に学習指導要領に基づいたアドバイスを貰えたことで、見えてくるものが多かったです。どの資質・能力をどのように育て、どこで発揮させ見取るのかなど、単元のゴールに向かい毎時間のつながりを考え、学びを単元全体で考えていくことが重要だと分かりました。



「思考・判断・表現」の評価は難しかったです。単元末のペーパーテストでの評価が中心で、形成的评价は曖昧だったことに気がきました。自身の指導を評価する工夫が必要だと感じました。



私も思考は見えないので、どう可視化させるか悩みました。思考の過程をノートに残すため、「思考の見えるノート」を自分なりに工夫して指導し、ノートを評価資料にして、指導-評価-改善のサイクルを回すようにしました。今回付けたい力に迫ることができたのは、その効果だと思います。またいつも使っているペーパーテストだけでは思考は適切に評価できないと思いました。



何をもってA「十分満足できる状況」とするのかなど判断の基準については、あれでよかったのか不安です。

Q. 授業（単元）を構想する際に大事だと思ったことは何ですか？



指導事項を教材で具体化していくための教材研究は何より大事だと思います。そのためには学習指導要領解説を読み込み、三つの資質・能力について理解しなければならないと思いました。

レディネステスト等により、児童の実態を把握することも非常に大事だと分かりました。誤答を分析し、つまずきの原因を知ることでつまずきに対する具体的な支援を準備できました。



学習指導要領解説を読み込み、教材に落とし込むことは、授業づくりに欠かせない作業だと分かりました。それにより「教科で育成する資質・能力」や、「教科特有の見方・考え方を働かせる」ということの理解が深まるように思います。

レディネス問題に何を選ぶか、問題の吟味も重要です。その単元の学びを支える既習として何が児童生徒に身に付いていなければならないか明らかにすることは系統性の理解につながりました。



「付きたい力（資質・能力）」を明確にして、教材に落とし込むことで、その力（資質・能力）はどう学べば育成されるか、指導法に工夫が生まれます。学習課題、提示方法、発問、学習形態、評価方法など、そのすべては「付きたい力」と「子供の実態」によることを実感しました。

算数では、問題解決に必要な情報を図や数直線などに整理して、そこから関係を見出し、立式する力を育てていきますが、図の見方、図の書き方、図の意味、そこを曖昧に指導してはいけなかつたことが分かりました。教えるべきことはしっかり教え、繰り返し使うことで、汎用的な力にしていける必要があります。



児童生徒に期待したい「振り返り」を考えていくと、より付きたい力が明確になりました。付きたい力が明確になると、単元の指導に一貫性が出てきます。プしることなく指導を進め、付きたい力に迫れます。

国語で初めてレディネスを取ってみました。課題解決に必要な以上に時間がかかってしまったのは、前の学年で獲得しておかなければならなかつた力（要旨を捉える力）が獲得されていなかつたからだと分かりました。これまでの自分は国語では既習を使って学びを進めていくという意識が低かつたのですが、今回の実践を通して積み上げを生かして学んでいく意識を自分も、児童も持つことができました。



児童生徒の立場になって、生徒の思考を思い描く作業も授業づくりに大事だと実感しました。発問や指示、資料の提示方法などがより効果的なものになっていきます。

「振り返り」からは、「知識が概念化された」様子や「見方・考え方の働かせ方が自覚された」様子などが見取れます。さらに「友達の考えを受けて、自身の考えが修正されたり、更新されたりした」様子、「今度は～でやってみよう、～でもできるけど私はこっちがいいなど意思決定する」様子など自らの学びを調整しようとしていることも見取れます。「振り返り」は三つの観点の評価資料になるとわかりました。それとともに、何を見取りたいかという教師の意図を反映して、「振り返り」の視点を設定する必要があると思いました。

総括

○五つの部会共に、学習過程において、その教科の見方・考え方を働かせ「既習の知識・技能を活用し、思考・判断・表現を繰り返して課題を解決しようとする」児童生徒の姿が見られました。

（学習した言葉、図、調査方法を自在に操り考える子供たちに育っていました。）

⇒学習指導要領に基づいて付きたい力を明確にし、単元の学びに必要な既習の知識・技能を見定めたこと、それを受けて事前の実態把握を的確に行つたこと、そのうえで単元前半に新たな知識を学習しながら既習の学び直しが図られるよう指導計画を組み児童生徒の学びを支えたこと、これらにより単元後半の活用、探究の場面での上記のような児童生徒の姿が実現したものと考えられます。

○「何を手がかりにして、どのように考えればいいのか」教科特有の見方・考え方を自覚した記載や友達の考えを受けた「自身の考えの変容」や「次の学びへの意欲」などが綴られた振り返りが多数見られました。

⇒教師が「付きたい力（資質・能力）」を明確にし、評価の視点をもって振り返りをさせることで、教師にとっては「付きたい力が付いたのか」確認する機会に、児童生徒にとっては「何が身に付いたのか」学びをメタ認知する機会になったと考えられます。これは教科の本質に迫る学びを通して力を付けたことを意味すると捉えられます。

『考える力を育む授業づくりのスタンダード』に基づいた「付きたい力を明確にした教科の本質に迫る授業」により、その教科で育成すべき資質・能力に迫ることができるという手ごたえを感じた研究となりました。本研究を受けスタンダードの見直しを図り、よりよい形にして来年度管内の先生方にお届けしたいと思います。

おわりに、ご協力いただいた教科研究員の先生方及び本研究会の授業を参観していただいた所属校の校長先生はじめ教職員の皆さまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

五つの授業の指導案を置賜教育事務所ホームページに掲載しています。先生方の授業づくりの参考にぜひご活用ください。

QRコード活用ください ⇒

